

Memoirs of the Osaka Institute
of Technology, Series B
Vol.49, No.1(2004) pp.1~12

Happenをめぐる意味論・語用論的考察

田岡 育恵

(情報科学部情報メディア学科)

〈2004年5月20日受理〉

A Semantic and Pragmatic Study of *Happen*

by

Ikue TAOKA

Department of Media Science, Faculty of Information Science and Technology
(Manuscript received May 20, 2004)

Abstract

Happen does not always express the unintentionality of the action expressed by the verb. It can refer to the unintentional occurrence of an event as a whole. *Happen* can also refer to the coincidence of two events rather than the lack of the subject's intention concerning a single event. *Happen* can co-occur with unintentional verbs. It suggests the absence of reason for the event in that case.

There are various polite usages of *happen*. Some of them have the effects of mitigating the tone of a request or that of disagreement. The other effect is to express the speaker's hope for a favorable outcome in a moderate way. These effects stem from the fact that the speaker denies motivation concerning the event. *Happen* can also have an effect of emphasis, which stems from the lack of motivation. This presupposition of *happen* renders unexpectedness or surprise concerning the event of the sentence.

*英語語法文法学会第11回大会ワークショップ(2003年10月25日、於関西外国語大学)にて口頭発表。

1. はじめに

本稿では、Taoka(2003)で示した *happen to* 不定詞の考察についていくつかの修正点を指摘し、*happen* の本質に更に迫ることを試みたいと思う。再考する部分を大別すれば、一つは非意図性をどのレベルで考えるのかということ、もう一つは *happen* の様々な文脈効果についてである。以下、Taoka(2003)を振り返りながら、本稿との相違点を明確に示しつつ、議論を進めていきたいと思う。

2. *happen*の非意図性

Taoka(2003)では、*happen* が行為の非意図性ではなく出来事の非意図性を表すということを主張した。Coleman(1975)は(1)のような文を挙げ、「本を買う」ということは意図的にすることであり、偶然することではないので、*happen* の意味を非意図とすることに異議を唱えた。

(1) I happened to pick up a book today that I think you might be interested in.

(1)のような文は例外的なものではなく、(2)のように *happen* が *look at* のような意図的行為を表す動詞と共起することはあるし、また、(3)のような *try* と共起することもインフォーマントチェックでは OK である。¹

(2) Some think the pen looks long, others say it looks short, others(those who happen to be looking at it almost end-on from where they are still sitting) might not be able to make out what it is. (COBUILD on CD-ROM)

(3) I happened to be trying to get it at that time.

このように *happen* が意図的な行為を表す動詞と共起することはまったく問題がない。Taoka(2003)では、動詞の意味自体としての意図性と文全体で何が起こったのかを問う出来事レベルの意図性とを区別し、*happen* が表すのは出来事レベルの意図性であるとしたのであるが、行為と出来事という区分は、いささか曖昧であり、また別の考え方も指摘されたので、以下に Taoka(2003)の考え方を再度、説明したいと思う。上掲の(1), (2)を用いて考えよう。

「本を買う」、「何かをじっと見る」というのは、その動作自体、無意識にするものではない。意図的行為である。Taoka(2003)では、これを行為の意図性と考えた。

(4) a. pick up a book (+intentional)

b. look at something (+intentional)

これに対して、(1)のような「君が関心を持ちそうな本を買った」の場合は「君が関心を持

ちそんな本を買うつもりはなかったのだが」というように、そこに偶然性を認めることができる。(2)の場合も、「後ろからそれを見ることになる」と、見る位置については意図しないことであったという点で、偶然と言える。

- (5) a. pick up a book that you might be interested in (–intentional)
b. look at it from end-on (–intentional)

このように、動詞の抽象的な意味ではなく、実際にどのような状況で行為がなされたのかということを考慮した具体的な出来事レベルでの非意図性を **happen** は表しているのだと、Taoka(2003)では述べたのである。さて、この考えに対し、英語語法文法学会(2003年10月25日 於関西外国語大学)で発表した際、本来、意図的な行為を表す動詞が **happen** と共起したために非意図性になったと考えるべきだという指摘があった。しかし、筆者は、その考えには賛成しない。(2)の **look at** は次の(6)の **look into** のような場合とは違うからである。

- (6) Jennifer turned and found herself looking into the deep black eyes of Michael Moretti.
(S. Sheldon, *Rage of Angels*)

(6)の場合は、見つめようと思っていたのに気がつけばそうしていたということであるが、(2)の場合は何かを見ようとしていたわけで、知らない内に見ていたというのではない。**happen** との共起により動詞が非意図的な意味に変わるとは思えないのである。(3)にしても、知らない内にそれを手に入れようとしていたのではなく、それを手に入れようとしていたというのは、あくまで意図的行為である。

(3)の偶然性は、たとえば、(7)のように、君が既にそれを手に入れているのに、それを知らず、自分も手に入れようとしていたというような他事の関わりで認められるものである。

- (7) I happened to be trying to get it when you had already got it.

同様のことは、次の例でも言えるだろう。

- (8) After chasing the boys for the first two years of law school, she was now chasing the men. Ray knew of at least two other law professors who were getting the same lingering routine as he. One just happened to be married. (J. Grisham, *The Summons*)
(9) She was absolutely certain that he loved her, and it was unfortunate that he also happened to be in debt. (D. Steel, *The Cottage*)

(8)は、彼女が何人かの男性を追いかけていたが、その内の一人は、たまたま結婚していた

というところに **happen** が用いられている。この偶然性は、主語の男性が、意図しないのに結婚していたということではない。男性が既婚であったことが意図しないことであったのは、寧ろ、彼を追いかけていた彼女にとってのことであり、(10)のように解釈することが出来る。その男性を追いかけることとその男性が既婚者であることの意図的関連付けを **happen** は否定している。

(10) She didn't intend to chase a man who was married.

(9)でも、彼に借金があることを表すのに **happen** が用いられているが、これも彼が意図しないのに借金を抱えていたというのではなく、(11)のように、借金があるから財産目当てで自分(=彼女)に近づいてきたのではないと、彼が自分を愛していることと彼に借金があることとの意図的関連付けを **happen** は否定しているのである。

(11) He didn't approach her because of her money.

同様の例をもう一つ見ておこう。

(12) I happened to be home when he visited my wife.

(12)の「私が家にいたこと」自体は、たとえば、その日は家でする仕事があったというように、何らかの目的、理由があつて、そうしていたのかかもしれない。「私が家にいた」ということの偶然性は、「彼が妻を訪ねてきた」こととの関係でのみ言えることである。

このように、**happen** がその文が表す事態の非意図性ではなく他事との関連付けの非意図性を表す場合があり、そのような場合を考えても、**happen to** 不定詞の不定詞部分の動詞を **happen** が非意図化するという考えには賛成できない。

以上、**happen** の非意図性について述べた。ここで断っておかなければならないのは、後で示すように、本来、意図が関わりえない事態を表すのに **happen** が用いられることもある。英々辞典では、**happen to** 不定詞は(13)のように書き換えられ、そこで用いられている **chance** を引くと、(14)のようになっている。

(13) to be or do by or as if by chance (*Longman Dictionary of English Language and Culture*)

(14) the force that seems to make things happen without cause or reason and that cannot be controlled by humans (*ibid.*)

(14)で述べられている、人間によってコントロールできないというのは非意図性ということになるが、原因・理由なく物事を生じさせているというのは、必ずしもそうではない。上

で述べたように、本来、意図が関わらないこともあるので、意図だけではなく原因・理由も入れて、「動機」の欠如とする方がいいと考える。動機は、次のように定義されている。

- (15) 人の意思決定や言動の直接的な原因・理由または目的となるもの(『三省堂新明解国語辞典』第4版)

英語で言えば、**motivation** ということになるだろう。**happen** の意味は、意図と原因・理由をひっくるめた動機の欠如と考えたいと思う。

3. 丁寧表現に寄与する happen

Taoka(2003)では、**happen to** 不定詞の様々な伝達効果を指摘したが、その中で丁寧表現に寄与する場合を取り上げ、Taoka(2003)の修正すべき箇所を指摘していきたい (cf. 田岡(2004))。

3.1 依頼の口調を緩和する happen

Taoka(2003)で要求の口調を和らげる **happen** について言及した。これは、Coleman(1975)が次のような文を挙げ、頼まれていることは別に重要なことではない、したがって、相手が頼まれた行為をしなかった場合に相手に逃げ道を与えると説明するところのものである。

- (16) Did you happen to pick up those things I asked you to get?

この **happen** の用法は、よく知られていて、教材や辞書にも取り上げられ、「口調を和らげる」、「丁寧な質問の仕方」になると説明されている。

- (17) Do you happen to know what his e-mail address is? (『英語リスニング入門』2002年9月号)

- (18) You don't happen to know her phone number, do you? (『三省堂ウィズダム英和辞典』)

このような **happen** について、Taoka(2003)では前述の Coleman の説明を紹介するに留まっていた。しかし、この説明では、何故、**happen** を用いれば重要ではないことになるのかということがよく分からないのではないだろうか。これに対して、本稿では次のように考える。この用法は依頼であり、相手はそれをしなければならないことになる筈だが、**happen** を用いることで相手のその行為に対する動機の欠如が示唆される。何かをしなければならないとき、それをしようとする意志が必要なのに、その意志が前提にされていないのだから、それをする義務もあるとは考えられていないということになる。したがって、相手を事態に

対する義務、責任から解放しているという点で、相手を気遣った丁寧表現になるのだと考える。

3.2 異議申し立てを緩和する happen

次に、(19)、(20)のような、相手の言動に異議を唱える場合の口調を和らげる happen がある。

(19) That happens to be my car you're leaning on. (*Longman Dictionary of English Language and Culture*)

(20) That happens to be my mother you're talking about. (*Oxford Advanced Learner's Dictionary*⁶)

(19)では、君がもたれているのは私の車だ、(20)では、君たちが話しているのは私の母のことだという文で、迷惑な不愉快な行為を相手から受けていることを表わしている。Taoka(2003)では、このような場合、happen の使用により注意の口調が緩和され、それは「本当は、このようなことは言いたくないのだが」というように、happen が話者の発言に対する不本意を示すからだと説明した。しかし、この点について考えを改めたい。というのは、(19)、(20)は、それぞれ(21a)、(21b)のように書き換えられ、happen が表しているのは、話者の発言に対する非意図ではなく相手の行為に対する非意図ということになるからである。

- (21) a. You happen to be leaning on my car.
b. You happen to be talking about my mother.

ここで happen を用いることの効果とは、happen が相手の非意図を前提にし、相手はそうしようと思ってその行為をしているわけではない、それと知っていたらしなかったというように、相手の他意、悪意を否定することになる。その分、相手を悪者にせず、相手を気遣った表現になるということだと考える。

3.3 話者の希望を控えめに表現する happen

この用法は、Taoka(2003)では言及していないものであるが、次のように、主節で話者が希望する事態を述べ、その前提になる事態を表す if 節の中で happen が用いられているものである。

(22) If Anne Christine should happen to read this, I would like her to know that 'Dr. Anderson' is still alive and sends her warmest greetings. (COBUILD on CD-ROM)

(23) For example, should you happen to want a Westward, a Pericom terminal and a Benson plotter, we should be happy to deliver them tomorrow. (*ibid.*)

ここで happen を用いることの効果というのは、if 節で表しているようなことを主語の人物 ((22)の Anne Christine, (23)の you) がしようとする意図や理由はないだろうが、万一、そういうことになればということで、その事態の成立の可能性を一段と低く表現していることになる。そうすると、その if 節の事態の成立に依存している主節の事態の成立の可能性も低くなる。主節の事態は話者の希望する事態であるが、その希望は成立の見込みが少ないように控えめに表現されることになるのである。

3.4 一時性を強調し、話者にとって有利な状況を謙虚に表現する happen

この用法は、Taoka(2003)で既に言及したものであるが、自分に有利な状況を謙虚に表現するという点で、happen の丁寧用法の一つと考えることが出来るだろう。次のような例である。

(24) 'Dumbledore happens to trust me,' said Snape. (J. K. Rowling, *Harry Potter and the Goblet of Fire*)

(25) The safest place on earth was wherever Albus Dumbledore happened to be.
(J.K. Rowling, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*)

Dumbledore が自分を信頼してくれている、Dumbledore がいてくれるという好ましい状態は、happen が用いられているため、根拠、理由のないことになり、今、たまたまそうなっているだけで、その状態が続く保障はないということを含意すると考えられる。したがって、話者は自分にとって有利な状態を謙虚に表現していると言えよう。

ここで、次のことに注意しておきたい。3.3 にも当てはまることであるが、その「控えめ」、「謙虚さ」は、それらの文が話者の希望や好ましい事態を表しているから、そのように言えるのであって、happen 自体が表しているのは、動機の欠如、そして、そこから推察される事態の一時性ということである。これが、話者、あるいは話者がエンパシーを置く人物にとってのことではなく他者のことであれば、控えめ、謙虚ということにはならない。もちろん、その場合でも happen は事態の一時性を表してはいるのだが、控えめ表現になるというのは、話者が自分に好ましい状況を述べる場合であればこそ、である。

以上、見てきたすべての場合において、話者が主語の動機を happen により打ち消すことにより丁寧表現となっているのである。

4. happenの強調効果

先に、happen 自体が控えめ表現なのではなく、場合によって、控えめ効果を出すのに寄与するのだという趣旨のことを述べたが、Taoka(2003)で言及したアイロニー効果についても同様に、皮肉は望ましい状況と現状の対照が感じ取られる場合にのみ生じるものだというのを、先ず、お断りしておく。その上で、この章では、アイロニーの場合も含めて happen の強調効果ということについて考えたい。3章で happen は丁寧効果、控えめ効果

に寄与するということを論じたのに、強調効果とは、一見、矛盾するように思われるかもしれないが、この強調効果も happen の「動機の欠如」からくるのである。²

4.1 アイロニーを際立たせる happen

アイロニー効果に寄与する happen としては、次のような例が挙げられる。

(26) So next time you hear someone lamenting the lack of good young writers out there, tell them there are plenty of them. They just happen to be old. (COBUILD on CD-ROM)

(27) So, why we need to paint the legs of an ant? Once they recover from the cold, they run, and Poly-REDAL's high-speed camera will capture the image. High-speed photography needs a lot of light. "We can use hot light, but that will also cook them in. We need to make them really bright so that we can make a good picture of it. And ants happened to be black. If we have white ants, we will not need to do it. ("See How They Run", *Discover Magazine Video*)

(26)は、いい若手の作家がいないということを嘆いていて、いい作家は多くいるのだけれども、皆、高齢者であるというところに happen が用いられている。望ましい状況はいい若手の作家がいるということなのに、いい作家は高齢者ということで、現状は望ましい状況の逆であるという点で皮肉になる。ここでの happen の効果は、happen は「動機の欠如」を意味するものであるから、述べられた状況がそうなる必然性はないのに、別にそうでなくてもよいのに、そうなっているということを含意する。これが皮肉を際立たせるものと考えられる。(27)は、蟻の足の動きを調べるため、その高速撮影をするのだが、高速撮影は大量の光を必要とするが、それでは熱も出て蟻を焼き殺してしまう。そこで、蟻の足に明るい色を塗る。蟻が白ければ、そのようなことをする必要はないのに、蟻の身体は黒い。ここに happen が用いられている。望ましい状況である「蟻が明るい色をしている」と現状の「蟻が黒い」の対比で皮肉が成立する。ここでも happen は現状に必然性がないことを示し、選りによって望ましい状況の逆になっていることを際立たせているのである。

この happen の「動機の欠如」、「必然性の欠如」が、往々にして、happen が用いられた文が「あいにく」や「折よく」と訳されることにつながる。その背後には、このようなことになるとは思わなかったのに、運悪く、あるいは運良くこうなったという認識がある。

ところで、(26), (27)の場合、「いい作家が高齢者である」ということも「蟻が黒い」ということも、本来、誰かの意図が関わることではないし、そのような状況を引き起こしている原因を取りざたすることではない。ということは、これらの場合、happen を用いずとも事態に必然性がないことは分かるのに、敢えて happen が用いられていることになる。happen で「必然性の欠如」を更に強調するということなのだろうか。この問題については、4.3 節で考える。

4.2 理由付けを断ち切るhappen

次のように、何か言い訳をする場合、happen は意図的にしたわけではないという点で言い逃れに効果的である。

(28) He told Dumbledore everything except that Mr. Weasley owned the bewitched car, making it sound as though Ron had happened to find a flying car outside the station.

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Chamber of the Secrets*)

言い逃れをする状況でなくても、happen を用いて先んじて「動機の欠如」を示せば、述べた事柄に対する理由付けを放棄することになり、相手に何故そうなのかと立ち入る隙を与えない。

(29) I happen to like her, so don't be so rude about her. (*Longman Dictionary of English Language and Culture*)

(30) I happen to adore bright colors. (COBUILD on CD-ROM)

(31) I happen to believe it's their business, not ours. (*ibid.*)

(29)–(31)の例は、「好きである」、「信じる」というように感情、思考を表している。感情や思考は 100 パーセント、意志でコントロール出来ることではないから、happen がなくても非意図であるとも考えられるが、happen を用いることで「理由はないけれどもこうなのだ」と、述べられた状況を一つの事実として相手に示す。しかも、相手に先回りして理由を問わせないで、「とにかくこうなのだ」とその状況を突きつけるような強さが窺えるように思う。では、次節で「動機の欠如」を示す必要のない happen について述べよう。

4.3 事態成立を強調するhappen

ここでは、「動機の欠如」を表す必要がないのに happen を用いている例を考察する。その効果とは、節題に示したように、事態成立の強調である。次のような例である。

(32) "I didn't take the bus to be solicited, Driver. I happen to be a serious salesman and I think it's inappropriate and unprofessional to allow a child to sell cookies on a bus."

(『英語リスニング入門』2003年10月号)

(33) It happened to be a nice (fine) day. (『研究社新英和大辞典』第6版)

(34) Today just happens to be our anniversary. (*ibid.*)

(35) Today happened to be the first time Harry would be in close proximity to Snape since Snape had thrown him out of his office. (J. K. Rowling, *Harry Potter and the Order of Phoenix*)

(36) Now, Stubby couldn't possibly have committed those crimes, because on the day in

question he happened to be enjoying a romantic candlelit dinner with me. (*ibid.*)

(37) "Would you mind turning off the air-conditioner? I happen to have a cold."

(『英語リスニング入門』2003年8月号)

(38) She's the sister of my best friend, who happens to be dead. (D. Steel, *Answered Prayers*)

(39) It was only a fluke that she happened to buy that ring. (D. Steel, *Leap of Faith*)

(40) Deborah: But anyway...how do you happen to know his stuff?

Chad: Cause I read it.

(D. Tannen, *Conversational Style*)

(32)は、バスの中で子供がクッキーを売ることに對して怒っている男性が自分のことを真面目なセールスマンだと言うところに *happen* が用いられている。ここで、自分は望まないのに偶然、セールスマンになったと言っているとは解釈しがたいし、他事との関連も考えがたい。この場合、*happen* がなくても伝えることは同じように思われるが、「これから言うことは、あなたの知らないことだけれども、一つの事実だ」と、やはり、ある事実を強く相手に示す、そのような効果を *happen* は持っているのではないかと思う。その効果の根拠は、最後に述べる。(33)も、「晴天だった」ということであるが、これは自然現象で、本来、動機を欠くことである。「偶然、晴れた」、「偶然、雨になった」とは言えないことである。ここでの *happen* も、晴れたという事実を強調して表現しているように思う。(34)の「今日が我々の記念日だ」は、他事との関連で、たとえば、その日が何か別の催しと重なり、重なるとは思っていなかったが、自分たちの記念日でもあるという偶然性を表す場合もあるだろうが、そのようなことが何もなくとも、ただ「今日が記念日だ」と相手に知らせたいがために、このように言う場合もあるだろう。*happen* を入れることで、その伝達内容が目立つ。(35)は、*Snape* に追い出されてから *Snape* に近づくのは今日が初めてだということで、意図しなかった状況ではあるが、「動機の欠如」をどうしても示さなければならないということではない。この *happen* も事態成立を強調するものだろう。(36)は、犯罪のアリバイを主張している文で、事件の時刻には容疑者は自分とデートしていたということであるが、「偶然、デートしていた」というより、これも事態成立の強調と思われる。「意外だろうけれども、このようなことになっていたのだ」ということを強調して相手に伝えているように思う。(37)の「風邪を引いた」も、そもそも動機が関わることではない。これも伝えているのは事態そのものである。(38)は、親友が既に亡くなっていることを表すのに *happen* が用いられている。もちろん、親友が偶然、死んでいたというわけではない。関連する他事も考えられない。彼女は親友の妹だという説明に続き、会話の相手からすると、話者の親友という新情報が出され、それはどのような人物かと聞きたくなるところを、予期せぬ「亡くなった」という事実が出てくる。ここでも、*happen* が入ることにより、その事実が強調される。(39)では、「彼女がその指輪を買ったのは偶然に過ぎなかった」ということで偶然が関わっているが、それは *fluke* で表現される。指輪を買ったという部分に用いられている *happen* は、その行為自体の偶然性を示すのではなく、「彼女がその指輪を買ったのだ」という事実を強調

していると考えられる。(40)では、どうして彼の研究を知ったのかという問いに対して、読んだからだと答えていて、事態成立の動機を示している。問いの文は、How did you come to know his stuff?と同じで、事態の偶然性についてではなく、事態成立そのものについて尋ねているのである。

そもそも、happen の原義は出来事の出来である。そう考えれば、かくかくしかじかのことが起こったということを表しているというのはうなずけることであるが、これらの例では「動機の欠如」を示していないのだから、一見、happen がなくてもよいのではないかという疑問が出てくるだろう。しかし、それは違うのである。何故ならば、事態成立を表す文ならどのような文にでも happen を入れることが出来るのかと言えば、必然性のあることには happen を用いることは出来ない。「起こらないかもしれない、そうではない可能性がある」ことについてでなければ、その成立を happen で表すことは出来ないのである。偶然性が意味の前面に出ているかどうかの差はあっても、happen と事の必然性は相容れないものである。³

この節で取り上げたような happen について、事態成立を強調する効果があると述べたが、それは、起こらなかったかもしれないことが起こったという認識が背後にあり、それを happen によって示すことにより、その事態の成立がインパクトを持って表現されることになるのだと考える。

5. おわりに

People who happen to be looking at it almost end-on from where they are still sitting might not be able to make out what it is のような文の happen は、look at という意図的な行為を非意図的なものに変えているのではない。行為自体は、あくまで意図的である。ここでの偶然性は、「見る」という行為ではなく「見る場所」に関わるものである。また、happen がその文が表す事態ではなく、他事との関連での偶然性を表すと考えられる場合もある。共起する動詞自体の意味が、意図的・非意図的という問題ではないのである。happen の意味は、「非意図性(unintentionality)」というよりも原因・理由も含めた「動機の欠如(the lack of motivation)」である。

happen の伝達効果としては、依頼の口調を緩和する、相手への異議を緩和する、話者の希望を控えめに表現する、話者にとって有利な状況を謙虚に表現するという、4つの丁寧効果を取り上げ、それらの効果と happen との関わりを見た。これらは、すべて、happen により主語の動機を話者が否定することから生じる丁寧効果である。次に、アイロニーを際立たせる、理由付けを断ち切る、事実を強調するという、一見、先に見た丁寧効果とは逆に思われる happen の強調効果について見た。これらも、その根源には「動機の欠如」が関係している。

以上、Taoka(2003)より更に考察を深めた happen 論を論じた次第である。

注

- 1 大阪工業大学の Stephen Petrucion 先生に判断をお願いした。
- 2 *Longman Dictionary of English Language and Culture* では、happen to 不定詞に give force to a statement という言及がある。ただ、これ以上の説明はされていない。
- 3 「偶然性」が意味の前面に出ない happen については、田岡(近刊)で詳述する。

参考文献

- Coleman, L. "The Case of the Vanishing Presupposition" in *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*. 1. 1975. pp.78-89.
- Taoka, I. "Communicative Effects of *Happen to* Infinitive" in *Memoirs of the Osaka Institute of Technology. Series B*. vol.48, no.1. 2003. pp.1-9.
- 田岡育恵「Happen の婉曲効果」『英語青年』5月号(研究社)2004. pp.44-45.
- 田岡育恵「Happen to 不定詞のモダリティ」『英語のテンス・アスペクト・モダリティ(阪大英文学叢書2)』(成田義光監修、英宝社)近刊.